

智識、道德、宗教に關する斷想

望 月 舜 勝

(この一文は昭和七年三月號身延教報所載「宗教は現代文化に如何なる役割を持つか」(上)の續稿として執筆せるものなるが未發表なるを以つて改題して本誌上に掲載せり。)

智識が人生に最も必要なものゝ一つであることは喋々を要せない。現代物質文明を生じたものは所謂自然科学智識である。又智識は吾々に慰安を與へるものでもある。昔の聖人賢人の書を読み、これによつて無限の慰安を得、或は教訓を得、或は人生苦に疲れたるものはこれに依つて解決を得るといふ事も出来る。智識が廣ければ廣い程益々吾々の慰安教訓を得る範圍も廣くなる。單に日本語文を讀む者は日本語によつて書いてあるものでその慰安教訓の材料を得らるのみであるけれども、外國語を讀むことが出来れば、これによつて更に一層廣く人間の精神的快樂を得ることが出来る。智識が廣ければ廣い程精神を教養して與れる範圍は廣くなる。故に智識は益々之を廣いことを要する。斯くの如く智識それ自身は人間生活に大なる利益を與へるものである。

元來物質文明も人間社會の必要に應じて自然に現はれて來たものであるから吾々が今日の物質文明を滅ぼしてそれ以前の世界に歸そうとしても到底それは人間生活の幸福を來す所以ではない。例へば鐵道がなくなつたら何處までも歩かなければならぬ。汽船がなくなつたら何處迄も小舟に乗つて行かなければならぬ。智識は進むほどいゝのである。併し乍ら智識それ自体は善用すれば大なる利益幸福を人生に與へるものであるが、反對に悪用すればその弊害は智識のない場合よりも更に甚だしいのである。昔の戰爭は僅か一騎打であつた。大將同志が兩方から出て名乗を揚げてその何れかの勝ち負けで大局がさまつたことすらあつたのであるから、死んだ所が僅かな人數である。

然るに近來の戰爭になると科學的智識が進歩して大仕掛の戰爭を行ふ様になつたから何十何百萬の人間を一時に動かすことも出来る。又武器も精銳を極めてきたから、従つてその死の數も昔時と比較にならぬ。それは全く智識の進歩した結果である。昔の盜賊は相應に悪事を働いたけれども、併しその智識が極めて幼稚であるからこれを防ぐことも容易であり又これを捕ふることもさほど困難ではなかつた。之に反して科學的智識が進歩するとその手段が陰險になり巧妙になりその害の及ぶ所甚だ大である。容易に捕縛されない。防衛術も巧になるが、それを遁るゝ方法も亦巧になる。斯くの如く智識そのものは善でも悪でもないものであるけれども、それを善用するか悪用するかによつて人生に

利益を與へ或は害をも及ぼすと考へなければならぬ。して見るに智識は實に人生に取つて好まじきもの、望まじきもの即ち價値あるものであるから吾々は何處までもこれを進めて行かねばならぬ。

併しこれには何かその根柢となるものが必要である。この智識を動かすところの根柢を確立せぬ以上、その智識の齎す所の幸福の量が多いか不幸の量が多いか、即ち人生に幸となるか不幸となるかは容易に判斷が出来ない。これは智識そのものによつてきまるのではなくして智識を動かすところの根柢如何によつてきまるものと考へなければならぬ。然らば如何なるものが智識の根柢となるものであるかといへば、それは人間の道徳であると言はねばならぬ。道徳心が進歩して凡ての人間が悉く善は之をなし惡は爲すべからずといふ事が實行出来る様になつたならば智識は益々その威力を發揮することを得。若し然らざればその恐るべき智識の威力も只惡い方面にのみ用ひられて人間の不幸はこれより大なるはない。高等なる教育を受け如何に智識を持つて居ても若しその人が信用あるものでなければその能力を十分に發揮することは不可能である。若しその人間が信用することの出来るものであつたならばその能力智識は少しは劣る者であつても、その智識をある丈使ふことが出来る。

故に道徳の進むといふことは最も重要なことであつて道徳が進歩しなければ人間社會に於いて幸福は所詮得られるものではない。併し道徳には所謂他律と自律とがある。他律とは他のものによつて支

配されることをいひ、自律とはその反對に自分自らが自分自身を支配することをいふのである。

例せば親とか師とかの命令により、或は國家の法律によつて拘束され、これによつて僅かに惡事をせず善事を爲すといふ如きもの、自己の意志は人の物を取りたい善事を爲すことも欲せずといふ如きものである。併し同家の法律によつて制裁を受けるのが恐ろしいから惡事を爲さないといふのは他のものによつて自分の心が支配されてゐるのである。これは即ち他律的行爲である。吾々の道德生活の多くは皆この他律の生活である。自分の欲望を抑へて惡事をせず、成るべく善事をするべく努めて行くのである。他のものに依つて支配されるといふ状態は道德的價值から言ふと甚だ亡ぼしいものであつて殆んど價値なしと言つても差支ない。

例へば今他人が私の手をもつて第三者を打つ、私はそれに抵抗しても抵抗が出来ない。他の者の力が非常に強くて何うしても自分の手を取つて他の者を打たしめる。その時に於いて他人を打つといふことは悪いことであるが、その責任は誰が負ふべきか、打つたところの手は私の手である。併し自分が自分の意志で打つたのではない。私はたゞその機械になつただけである。だからこの場合道德の責任者は私ではなくしてこの私の手をもつて他の者を打たしめた者にあると言はねばならぬ。

それと同様に他律は他のものによつて支配され他の者によつて脅迫され、他の命令によつて行ふの

であるからその命令された者は自分の意志からやつたのではない。即ちその動機から云ふと何等價值のないもの、人の命令をそのまま受けてやつた丈で結果から云へば善事は善、悪事は悪であるけれども動機から云ふと道德的價值はない、故に他律的行爲は眞の道德的行爲ではない。勿論他律的行爲でも出来る方が餘程よいのはある。世の中には道德法や國家の法律を心得て居てもこれを潜り自己の欲望を恣にせんとする者が尠くない位であるから他から脅迫されても、縦ひ自分の意志はそれに反對であつても實際に於いてはそれに従つて善事を行ふことは好ましくもあり必要なことでもある。けれども道德的價值から云ふと零である。

眞の道德的價值ある行爲は自律的でなければならぬ。自分の心でこうしなければならぬ斯ふしなければ満足することが出来ないといふ自己自らの衷心から湧き出たものでなければ本當の道德的行爲とは云へない。即ち自分の自由意志によつてなしたるもの、外から強制せられて行ふのでなく自分の自由意志から出た行にして始めて自律的といはれ道德的價值を有するものである。

例へば貧者を見て憐愍の情に堪へずこれはどうしても救ふてやらなければ心に濟まない。満足が出來ないといふ風に考へて慈善を行ふ。慈善行爲をなしても斯ういふことをやつて置けば人から彼此云はれないとか世間態がいひとか或は社會上の地位を保つ爲に都合が好いとかいふのは他律的であ

る。その行爲は不純なる動機から起つて居る。自分の本心では實際やりたくない。併し色々な外界な事情によつて束縛されて止むを得ずするのである。實際社會にはこれも必要であるけれども眞の道德的價值から云ふと無價值である。道德は自律に至つて極まる。孔子の所謂心の欲するところに従つて矩を踰えずといふが如きは自律である。こゝに至れば道德法はない。道德は如何やうであつても自分の心に濟まない、どうしても斯うしなければならぬと考へるのである。法律は禁じてあつても禁じてなくとも構はない、自分の意志を以て行ふのである。

元來道德的生活は積重的のものである。万事について修養を積み重ねて行くのである。例へば親に孝をしなければならぬといふ場合、吾々は親に對して自分の勝手を抑へ、孝の習慣を積んでゆく。斯くして道德的生活が漸次進歩する。道德は畢竟慣習である。積み重ねるものであるから容易ではない。故に一事を完全圓滿に行ふことはむづかしい。一切の行爲が自律的になるには大なる修養い。併を要する。こゝに於いて宗教的教養が必要となる。日常道德の原因の如きものは教育勅語で遺憾がないし之を本心から實踐することは容易ではない。今日教育勅語を知らぬものはない、けれどもこれを完全に行ふものは僅少である。こゝに至つて宗教の必要を生じて來る。

凡て人間は境遇に支配されるものであるからその境遇に依つて人心に感化するところが異なる。一般

社會の者に取つては心を直接に教養するといふよりも境遇によつて教養するといふ方が餘程効果の多いものである。吾々が神社佛閣に參拜するとそこへ行つた丈で何となく莊嚴神聖な気分になる。心も自ら引き締る。普通の公園や道路を歩いてゐることは全く心持が異つて來る。これは神聖な境界が吾々の心を感化支配して行くのである。一度寺院とか教會の中へ這入れば自ら莊嚴神聖の感に打たれる。特にそれが外界の雜音から遠く離れ電車の響車馬の往來を避けて建てられ建築の内部に種々な莊飾彫刻繪畫で莊嚴され讀經が行はれ或は音樂が奏されて居る場合、これに接する者は恰も別世界にあるかのような心地がする。その境に這入つたといふことが人間の心持に非常に大なる感化を與へるのである。斯ういふ風になつて行かなければ人間の教化といふことは容易に出來ないと思ふ。昔平安朝時代佛教信仰の盛時もやはり儀式作法が人間の心に大なる感動を與へたに相違ない。天台眞言の教理などは一般大衆には容易に解るものではない。然るに社會人心に偉大なる教化感化を與へたといふのはその莊嚴なる儀式作法に存するのではないかと思ふ。莊嚴に建築された殿堂内で様々な儀式を行ひ音樂を奏し稚兒の舞が行はれる、これを見てゐると恍惚として心酔する様な心持になつて仕舞ふ。これに依つて宗教の感化が與へられるのである。これが説法と相俟つて宗教的感化となるのである。

更に宗教的修行によつてその心を教養してゆく。宗教は道德の如く積重的のものではない。或る時

期に於いて忽然としてその心持が變つて來る、所謂心機一轉する。古來高僧の傳記をみても忽然大悟といふことが屢々顯れて居る。これは或る機會に會つて是迄解らなかつた所が忽然として解る。これまで穢らしいものと思つて居たものが一時に變つて清淨なものとなり、有限なものが無限なものとなり、寸前暗黒であつたものにも光明な世界が展開する。これが宗教の妙味である。何か或る機會に遭ひ若しその時内の心が熟して居ると忽然として局面が變つてしまふのである。即ち心の改革が行はれる。道德の積重的にして、大なる努力を費すに非ずんば到底達し難い境地も、宗教にあつては如何なる人間でも一定の修養によつて忽然として達することを得るのである。この大悟とは所謂小我を没して大我に歸入して眞の自由となつたのである。即ち自律的となつたのである。自由の意志によつて働く以外の何物によつても拘束されず一切を超越するのである。これが宗教の極地であり、又其の效果である。

人間生活に於いて智識も必要であり、道德も必要ではあるけれども宗教の立場から云へば表面的のもの皮層的のものである。斯く考へて來る時、宗教の基礎に依つて初めて道德も完きを得、道德が完全なることに依つて智識も善用されることになり智識の眞の威力が社會に發揮せられて人生に於てあらゆる幸福利益を増進するのである。人生究竟の目的究竟の基礎は宗教に依存するといはねばならぬ。現今所謂物質的文明の弊害は要するに道德的基礎を欠くからである。而してこの基礎を養ふには宗教に依らねばならぬ。この基礎から養つて行かなければ到底その効果を全ふすることは出來ない。これが仰々宗教の重せられる以所である。